

実践報告

理工系大学院留学生を対象とした 初級日本語教育シラバスの構築

深川 美帆・高島 智美・多胡 夏純・筒井 昌子^{注1}

要 旨

日本の大学で学ぶ理工系正規留学生が研究と日常生活の中で必要としている言語行動を、留学生と留学生の身近にいる日本人学生を対象に調査し、留学生が日常生活および研究の遂行のため、さらには周囲との人間関係構築のために行うやりとりの具体的な場面・話題を明らかにした。また、留学生はこれらのほとんどの場面・話題において日本語でコミュニケーションできるようになりたいと考えていることもわかった。これらの結果をもとに初級レベルの日本語教材のシラバスを構築した。

【キーワード】 理工系大学院留学生, 日本語教育, アカデミック, コミュニケーション, 場面・話題シラバス

I. はじめに

本稿は、金沢大学で学ぶ理工系大学院留学生を対象とした初級レベルの日本語教材開発のために行った、留学生と日本人のコミュニケーション場面の調査結果と、それをもとにしたシラバスの構築について報告するものである。

筆者らは、本学において学習者数が増加している理工系大学院留学生を対象に、2014年秋学期より開講した初級レベルの日本語コースの教材作成を目指し、調査・研究を行っている。本稿ではまず、本学の理工系大学院留学生の日本語教育のニーズの特徴について説明し、次に、今回行った調査の結果と考察を述べ、得られた調査結果から作成した新教材のシラバス案を提示する。

1) 本学の理工系大学院留学生の日本語教育のニーズ

金沢大学国際機構留学生教育部^{注2}の総合日本語プログラム(1学期16週)では、理工系大学院留学生を主な対象として日本語ASコースを開講している。本コースは、日

本語AS 1 (以下, AS 1)と日本語AS 2 (以下, AS 2)の2クラスから成り, AS 1は初学者から入門修了程度, AS 2は入門修了程度から初級前半修了程度のレベルに設定されており, 両クラスとも, 1週間に2コマ(1コマ90分)ずつ開講されている。AS 1を修了した学習者は, 次の期にAS 2へ進級することができ, 実際AS 2へ進級する者が多いが, 研究生活の多忙により, AS 1だけで日本語学習を停止する者もいる。

本学の多くの理工系大学院留学生は, 研究自体は英語で行うことから, 日本語は主に大学内外での日常生活において必要だと考えられる。ただ, 彼らは在学期間が長いこと, また, 研究自体は英語で行う場合でも, 研究や実験を円滑に行うためには日本語が有用であることから, 単なるサバイバル日本語ではなく, 基礎からしっかり学びたいという要望がこれまでも寄せられてきた。それを受け, ASコースの学習目標を, (1)アカデミックな場面及び日常生活場面において, ごく簡単なやりとりができるようになる, (2)必要な場面で用いられる語彙や文型を含めた, 入門から初級前半レベルの基本的な日本語知識を身につける, (3)ひらがな, カタカナを読むことができる, とし, 主教材として『Situational Functional Japanese』(以下『SFJ』)を用いた授業を行ってきた。

このように, 学習者のニーズに応じたコース設計を行い, 授業を実施することで, 履修登録者の増加, そして, 履修者の中途離脱の減少など, 一定の成果を上げることができたが, 授業を実施していく中で課題も見えてきた。主教材として使用している『SFJ』は, 本来, 大学の予備教育コースなど, 日本語学習時間数が多く設定されている集中的な日本語コースでの使用を目的として作成されたものである。学習内容自体が多い。また, 取り上げられている場面も多いため, 週2コマの本学のコースで使用するには, 学習者がどのような場面・機能での日本語のやりとりを必要としているかをさらに絞り込む必要があった。こうしたことから, 筆者らは, より本学の学習者らのニーズに合わせた教材作成の必要性を感じ, 学習者に対するより詳しいニーズ調査を実施し, その結果を教育内容に反映させることが必要だと考えた。

2) ニーズ調査から得られた結果と課題

上述の課題から, 深川・高畠(2018)は, 理工系大学院留学生がどのような場面において日本語を必要としているかを明らかにし, ASコース用の教材に反映させることを目的として, ニーズ調査を行った。調査の対象は, 本学の大学院修士課程あるいは博士後期課程に在籍する留学生62名であった。調査の方法は, 大学内外での生活において日本語が必要な場面を, これまでのASコース履修者への聞き取りをもとに行動記述文として筆者らが作成し, それらの行動記述文に対して, 「その場面で日本語がどの程度必要か」「今の時点ではどのくらいできるか」を5段階のリカートスケールでつけてもらった。その結果, 以下のことが明らかになった。

(1) アカデミック場面(研究)におけるニーズ

自分の周囲の人々、つまり、大学の職員や日本人学生、教員とも日本語でのやりとりができるようになりたいと望んでいるということがわかった。学習者らは、自身の研究自体は英語で事足りるとしても、研究室での日本人学生とのやりとりやゼミでの発表を理解するなど、日本語を習得することで、研究生活が円滑になると感じていることが窺われた。

(2) アカデミックな場面以外(日常生活)におけるニーズ

日常生活を遂行するために必要な、生活場面での基礎的な日本語ができるようになりたいと考えていることがわかった。「買い物」「場所を聞く」などの場面がこれに当たる。また、家族を帯同して来日している留学生も少なくなく、子どもがいる場合は、保育所、幼稚園でのコミュニケーションや連絡帳などの理解が必要だと挙げている学習者もいた。

このように、ニーズアンケート調査の結果から、本学の理工系大学院留学生がどのような場面で日本語を必要としているかについて、その大まかな内容がわかったが、課題も残った。それは、「クラスメイトや研究室の人とコミュニケーションする」「指導教員とコミュニケーションする」ことができるようになることを学習者が強く希望しているということは分かったものの、具体的にどのような場面や話題でのコミュニケーションを必要と考えているのかが依然不明であるという点である。例えば「研究のスケジュールの相談」などといった研究の遂行に付随するような事柄に関するやりとりを望んでいるのか、「雑談する」といった人間関係構築のためのやりとりを望んでいるのかが、この調査結果からは見えなかった。学習者らが本当に必要とする生活場面でのやりとりが学べる教材を作成するためには、この点を明らかにする必要があると考えられた。また、この調査は、日本語クラスを履修している留学生のみを対象として行ったものであるが、彼ら自身が気づいていない隠れたニーズを探るため、留学生と同じ研究室に所属する日本人学生に対しても併せて調査を実施することにした。

II. 先行研究

本調査の実施に先立ち、これまでに行われた理工系大学院留学生の日本語ニーズに関する先行研究と、シラバス構築に関する先行研究について述べる。

1) 理工系大学院留学生のニーズに関する先行研究

理工系大学院留学生が必要とする日本語について調査したものには、羽吹・篠原(2014)、山路・因・アブドゥハン(2017)等がある。

羽吹・篠原(2014)は、日本国内の20近くの大学で、理工系大学院に所属する留学生と留学生のいる理工系大学院研究室に所属する日本人学生に対し、大学生活や日常生活における日本語使用状況を把握するため、ウェブ上に作成したアンケートフォームに回答する形式で調査を実施している。この調査結果から、「研究自体は英語のみで行えたとしても、研究室のメンバーと交流を深めたり日本人学生とよりよい関係を作ったりする上では日本語を使ったほうが望ましく、また、大学以外の日常生活では否応なく日本語使用が求められる実状がある」と述べており、これは深川・高島(2018)での結果とも重なっている。

ただし、羽吹・篠原(2014)の調査対象は本学のASコース対象者とは異なり、対象となった留学生の国別出身者数は多い順に中国68、韓国35、インドネシア24、マレーシア20、ベトナム18となっており、漢字圏の学生が占める割合が高い。また日本人学生に対する留学生の使用言語は「いつも日本語を使う」が55.7%という回答があったこと、研究活動や大学生活での日本語使用場面について、「ゼミで議論する」という場面で「よく使う」が46.5%、「時々使う」が10.4%、「ゼミで発表する」という場面で「よく使う」が41.3%、「時々使う」が7.5%となっていることから、少なくとも中級以上、上級レベルの学生が多いのではないかと考えられる。一方、本学のASコースの理工系大学院生の多くは非漢字圏出身者で、国でまったく日本語を学ばずに来日するケースが多い。したがって羽吹らの調査結果をそのまま本学の学生の状況に当てはめることはできない。

また、山路・因・アブドゥハン(2017)では、「研究活動に従事しつつ限られた条件の中で日本語を学びたい学習者に対する教材のシラバスと学習活動への示唆を得る」ことを目的として、実際に市販されている教科書を用いて授業を行い、1)授業担当教員による観察、2)受講者を対象としたコース途中および終了後の記述式調査・聞き取り調査を行って受講者のニーズを分析し、それを満たすコースの要件を検討している。山路らは、研究活動上は日本語力を要しないとされる研究留学生であっても、生活上はもちろん研究室内外での円滑なコミュニケーションのためにも日本語力があつたほうが良いという認識を持っているが、大学で実施されている日本語教育の内容は必ずしも彼らのニーズを満たすものとなっていないことを指摘している。

こうしたことから、やはり筆者らが対象とする学習者について新たに調査をし、具体的なコミュニケーション場面について明らかにする必要があると考えた。

2) シラバス構築に関する先行研究

次にシラバス構築に関する先行研究として、鹿嶋(2005)を挙げる。

鹿嶋(2005)は「サバイバル・ジャパニーズ」の定義付けと、シラバスとの関係についての確認を行い、初級入門期用の日本語教材4種に関するシラバスの分析の結果を報

告している。鹿島(2005)は分析結果を基に、「初級準備段階」としてのサバイバル・ジャパニーズに必要とされるシラバスの特性について、次の3点を指摘している。

- 1) 場面・機能・話題を明示する必要性
- 2) 文法項目の限定と単純化の必要性
- 3) 各課完結型のモジュール特性の必要性

1)は場面シラバスの長所に加え、「場面」や「機能」を「明示することによって、学習者に現実的な状況設定下での日本語習得を促すだけでなく、今後生じる可能性のニーズをも意識化させる効果が感じられた」ためであるとしている。2)については、「サバイバル・ジャパニーズは、「最低限必要な」「短期的に」という要点を持つ」ことから、その必要性を述べている。3)については、多忙な学生が自分のスケジュールに合わせて学習できることや、学習者のニーズの多様性にも対応できる形式として、その必要性を述べている。これらの特性は、いずれも筆者らの目指す教材においても重要な点である。ただし、上で挙げた2)については、深川・高島(2018)の調査から、本学の学生に関して言えば、基礎的な部分から日本語をしっかりと学びたいと考えている学習者が多いことがわかっているため、本学のASコースでは、サバイバル的な日本語であるとともに、今後の日本語での理解・運用のための基礎を固めるための表現や語彙を盛り込んだ汎用性のある日本語教育の提供が必要であると考えられる。

Ⅲ. 理工系大学院留学生の言語行動調査

1) 調査の概要

目的

本研究では、本学の理工系大学院留学生への日本語教育のシラバスを構築するにあたり、実際に研究室をはじめとする学内および学外で留学生と日本人がどのような場面・話題で話しているのか、また、どのような場面・話題が日本語で理解できれば研究室内でのコミュニケーションがスムーズに行えるのかという観点から、その具体的な場面・話題を明らかにすることを目的としてアンケートによる調査を行った。

調査項目

留学生用とその身近にいる日本人学生用の2種類の質問紙を、留学生用は英語で、日本人学生用は日本語で作成した。なお、留学生は記名式、日本人学生は、記名は任意とした。

留学生に対しては、研究室や学内において、使用言語の区別なく日本人とのコミュニケーションが、どんなとき(when)どこで(where)誰と(with whom)どんな話題(topic

of conversation)について行われたのかを、英語または母語で記述してもらった。また、それらの中で、日本語でコミュニケーションをとりたいと思った項目についてもたずねた。日本人に対しては、質問用紙を受け取った留学生と日頃どのような場面で話すかを、いつ、どこで、何をするとき/どのようなこと の3つの項目について質問し、これらの場面の中でコミュニケーションが難しかった、あるいはうまくいかなかったものがある場合には具体的な説明の記述を求めた。そして、これらの場面における主たる使用言語を、イ) 主に日本語で話す、ロ) 日本語と英語またはその他の言語の両方を使って話す、ハ) 主に英語またはその他の言語で話すの3つの選択肢から選んでもらった。さらに、「日頃この留学生とコミュニケーションする中で、こうしたことが日本語でできるようになると、研究・大学生活がより円滑に進むのではないか」という記述回答欄も設けた。

実施方法

調査は、2018年7月下旬から8月上旬にかけて、2018年春学期に本学留学生教育部で開講している日本語科目のうち、学期開始時に日本語学習を始めた理工系正規学生が多いクラスである「日本語AS1」「日本語AS2」「日本語A」を履修している留学生(45名)と、留学生の所属研究室の日本人学生を対象にアンケートを実施した。

アンケート用紙は授業内に留学生に配布し、配布日の前後約一週間の日本人とのコミュニケーション場面について記述してもらった。また、それぞれが研究室内でよく話す日本人がいる場合には、留学生からその日本人学生に、アンケート用紙の記入を依頼してもらい協力を得た。アンケートに回答した留学生は22名であり、回収率は51.1%であった。また、日本人学生は22名であり、回答した留学生22名のうちの16名の留学生と接している日本人学生から回答を得ることができた。

2) 回答者の属性

留学生

回答した留学生は22名で、国籍は、インドネシア14名、タイ3名、中国2名、ベトナム1名、マレーシア1名、ロシア1名と、東南アジアからの学生がほとんどである(図1)。性別は、男性が13名、女性が9名である。所属は、自然科学研究科が15名、医薬保健学総合研究科が1名、人間社会環境科学研究科が1名、留学生教育部が5名である(表1)。このうち修士課程の学生が15名、博士課程の学生が1名、非正規学生(協定校からの交換留学生(学部生)など)が5名である。これらのプロフィールは、本学のASコースで学ぶ留学生全体の属性と一致している。また、履修している日本語クラスの内訳は、AS1クラスが14名、AS2クラスが4名、Aクラスが4名であった。

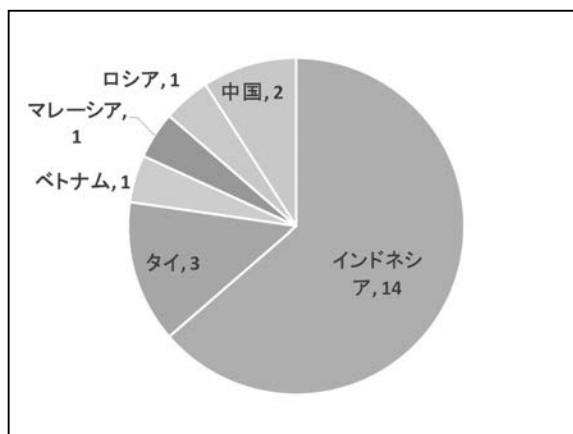


図1 回答者(留学生)の国籍

表1 回答者(留学生)の所属

医薬保研M 非正規生	1
自然研D 環境デザイン学	1
自然研M 機械科学 機能機械コース	1
自然研M 自然システム学 化学工学コース	1
自然研M 自然システム学 地球環境学コース	1
自然研M 数物科学 計算科学コースA	2
自然研M 数物科学 計算科学コースB	3
自然研M 電子情報科学	6
人社環研M 人文学 A.学際総合型プログラム ^{注3}	1
留教 非正規生 科学技術短期留学プログラム	5
計	22

日本人学生

回答した日本人学生は22名で、性別は、男性が¹17名、女性が⁵5名である。所属は医薬保健学域1名、理工学域2名、医薬保健学総合研究科1名、自然科学研究科15名、人間社会環境研究科3名である(表2)。学年は学類生が3名、修士課程が¹17名、博士課程が²2名である。なお、日本人学生の中には、1人で複数の留学生それぞれについて回答している人もいたため、日本人学生の回答件数としては、24件となる。

表2 回答者(日本人学生)の所属

医薬保健学域 薬学類	1
理工学域 機械工学類	1
理工学域 電子情報学類	1
医薬保健学総合研究科 創薬科学専攻	1
自然科学研究科	1
自然科学研究科 環境デザイン学専攻	1
自然科学研究科 機械科学専攻	2
自然科学研究科 自然システム学専攻	1
自然科学研究科 数物科学専攻	2
自然科学研究科 電気電子工学専攻	1
自然科学研究科 電子情報科学専攻	5
自然科学研究科 物質化学専攻	2
人間社会環境研究科	1
人間社会環境研究科 国際学	1
人間社会環境研究科 人文学	1
計	22

Ⅲ. 調査結果と考察

1) 留学生の言語行動調査結果と考察

留学生には、大学生活において、日本人学生と1)いつ、2)どこで、3)だれと、4)どのような話題や用件についてよく話すことがあるかをできるだけ詳しく英語または母語で記述してもらった(参考資料)。なお、その際の使用言語については特に日本語だけとは限定せず、日本人と接触してやりとりをした場面を挙げてもらった。さらに、それらの場面のうち、日本語でコミュニケーションできるとよいと思うものにチェック(✓)を入れるよう指示した。このようにして記入をしてもらって挙げた、留学生が日本語でコミュニケーションをできるとよいと思っている場面・話題は、全部で114であった。

まず、場面についてみると、学内が79場面、学外が35場面と、学内での日本人とのやりとりの場面が多いことがわかった。その内訳をみると、学内では、「研究室」が50で最も多く、次に「授業」「寮・宿舎」「学内事務」「食堂」「大学構内」と続く。留学生が大半を過ごす研究室場面においての日本人との接触場面が多いことがわかる。学外では、「店(スーパー、コンビニなど)」「レストラン」「交通機関」「医療機関」「行政機関」など、留学生が日常生活を送る際によく利用する場所でのやりとりが多いことがわかる(表3)。

表3 留学生が日本人とやりとりをする場面

研究室(学習室, 実験室など)	50
店(スーパー, コンビニなど)	15
授業(専門, 日本語など)	8
寮/宿舎	8
レストラン	5
学内事務	5
食堂	5
交通機関	4
大学構内(体育館など)	3
パーティー	2
医療機関(医院, 病院)	2
行政機関	2
地域(子どもの小学校)	1
銀行	1
旅行中	1
(不明)	2

これらの場面で、どのような話題についてやりとりをしているのかを、場面ごとにまとめたのが表4である。これを見ると、まず、学内で最も多かった「研究室」では、研究や実験の遂行に必要な情報要求・情報理解(例 研究で使用する機器の使い方を知る)のほか、学習や研究を行うにあたって必要となる情報要求・情報理解(例 発表のスケジュールを知る)などが多い。また、研究や学習とは関係のない話題での「雑談」なども少なくない。「授業」では、研究室と同様、スケジュールや内容についての情報要求・理解が見られた。「学内事務」「食堂」「大学構内」においても、生活上必要な情報要求・理解にかかわるものが多いことがわかった。

学外で最も多かった「店」では、必要な情報要求(買いたいものの有無や所在を聞く、商品についての情報を得る)の他、店員からの質問理解(支払方法についての質問)などが上がっていた。その他、「レストラン」「交通機関」「医療機関」「行政機関」など、日々の生活を送る上で関わりのある場面が挙がっている。

表4 場面ごとの言語行動(留学生学生)

場所	言語行動
研究室	<p>[研究・実験] 研究で使用する機器の使い方を知る 実験の手順を知る 研究に関する疑問に対する回答を得る (他の学生の)実験を手伝う 自分の研究について発表する 読むべき参考文献を知る</p> <p>[研究生活] 教室がどこにあるかを知る コースに関する情報を得る 時間割変更の情報を得る 宿題のやり方を知る 歓迎会の日程や場所、費用等の情報を得る 先生の在室時間を知る 発表のスケジュールを知る メールや書類の内容を知る</p> <p>[交流] 挨拶する 雑談する(研究、日常生活、趣味や好きなことなど)</p> <p>[生活情報] 市役所のことについて聞く</p>
店	<p>買いたいものの有無、所在を聞く 会員の申し込みをする 商品を求める 店員から商品などの情報を得る 支払方法についての情報を得る</p>
授業	<p>日本語の会話練習をする 話し合う/課題の準備をする 発表に対する質問内容を知る 宿題についての疑問に対する回答を得る 研究に関するディスカッションを行う</p>
寮/宿舎	<p>一緒に料理し、食事をする 新しい日本語のことばを知る トイレの使い方を知る 日本語の練習をする/日本語を直してもらう 雑談する(一日にあったこと、生活について)</p>
レストラン	<p>来店人数を伝える、食べ物について知る、支払いをする 注文・食べ物に入っているものを知る 注文する</p>
学内事務	<p>奨学金受け取りのサインをする 奨学金について情報を得る・申し込みをする 書類を提出する わからないことについてたずねる</p>
食堂	<p>どんな食べ物かたずねる、値段を知る 注文する 雑談する</p>
交通機関	<p>(空港で)係員から必要な情報(トイレがどこにあるかなど)を得る (駅で)バスや電車の時刻を知る (駅で)自転車置き場の所在を知る</p>

大学構内	目的の場所までの行き方を知る 施設の他の利用者の利用時間等の情報を得る 雑談する
パーティー	雑談をする(自国・金沢について) 雑談する(相手のことを知る)
医療機関	症状を伝える (歯科で)看護師に子どもの症状を伝える
学校	子どもの先生と子どもの成績について話す
銀行	ATMの使い方を知る
行政機関	市役所で手続き(保険, 在留カード, 保育園)をする 市役所からの書類の内容について知る
旅行中	目的地への行き方を知る
(不明)	雑談する(相手の国, 趣味について)

この中でも、特に多かった、研究室場面でどのような話題でやりとりが行われているかを表したのが、図2である。これを見ると、「研生活」のように、例えば、ゼミの日程を確認したり、研究室内のルールについて教えてもらったりと、研究・実験の内容そのものではないが、それらを円滑に行う上で必要な情報のやりとりを日本人学生とよくしていることがわかる。次に、実験の手順を覚えてもらうなどといった「実験・研究」に関するものが多い。これら研究に関わる話題の他には、挨拶や雑談などの「交流」も多かった。これは、研生活を行う上で、研究・実験に関わること以外の話題でもやりとりをしていることから、日本人学生ら研究室のメンバーと人間関係を構築していく上で、言語によるコミュニケーションが必要不可欠であることがわかる。また、学外の日常生活に関することについてのやりとりも見られた。

留学生に、アンケートに自分が記したすべての場面から、日本語でできるとよいものを選択してもらったところ、114場面中、93場面(81.6%)を選択していた。選択されていないものは、例えば「日本語のメールや書類の内容」などがあるが、これは、内容的に複雑なことについては、英語またはその他の言語でやりとりしたほうがよく理解できるからであろうと思われる。この回答から、本調査に協力した留学生、すなわち、日本の大学で研究を行う初級レベルの日本語クラスを履修している学生は、自分にとって必要な上述の場面においては、できるだけ日本語でやりとりをする必要性を感じていることがわかる。

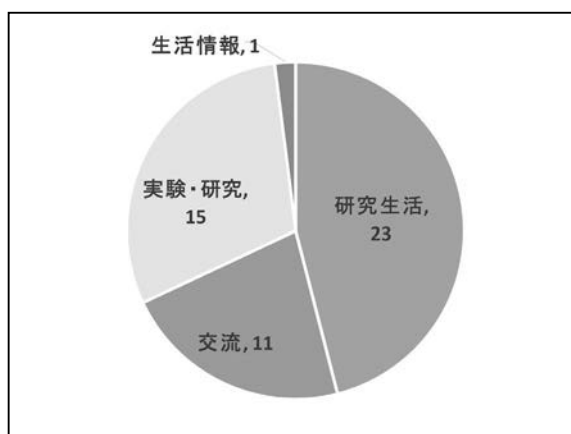


図2 「研究室」場面での話題

次に、これら留学生と日頃よく接触する日本人学生からの回答結果を、留学生の回答結果と照らしながら、分析・考察する。

2) 日本人学生の言語行動調査結果と考察

日本人学生には、留学生と、日頃、1)いつ、2)どこで、3)何をするとき・どのようなことについて話すか、思い出せる限りできるだけ多く記述してもらった。回答した22名から得た場面は全部で81場面だった。場面のほとんどは大学内(主に研究室やゼミ)であるが、学外などでいっしょに食事をしたりするような場面もあった(表5)。

表5 日本人学生が留学生とやりとりをする場面

研究室	48
ゼミ室/教室	9
実験室	6
院生室	5
食堂など(学内)	4
店	4
学外	4
留学生の寮	1

次に、それぞれの場面でいつ、どのようなときにやりとりをするかをまとめたのが表6である。これを見ると、ゼミや実験とその前後の休憩時間などでよくやりとりをしていることがわかる。全体を通して見ると、さまざまな折に、日本人学生は留学生に生活上必要な情報についてたずねられたり、サポートしたりしていることが窺える。

また、研究や学習以外にも「雑談」として、さまざまな話題で会話をしていることがわかる。

表6 場面ごとの言語行動(日本人学生)

場面	言語行動
ゼミ	自己紹介する 研究に関して議論・質疑応答する 発表内容について質疑応答する 出欠の確認、場所や時間の確認をする 授業内容について質疑応答する 英語のチェックを依頼する
実験	実験内容、研究室のルールについて説明する 実験装置(試薬の扱い、器具の洗浄など)の使い方を説明する 実験のプロトコルについて説明する 翌日の実験予定、実験のサポート、協力してほしいことについて説明する 実験手順を説明する 実験結果に関する質疑応答と話し合いをする 測定がうまくいっているか確認する 実験についてアドバイスする 研究室のルールなどを守っていないときに注意する 分からないことがあったときに説明する 世間話(天気、文化の違い、最近のニュース、恋愛話など)
休憩時間	日常会話・雑談(マンガの話、昨日の出来事、お子さんの話) 日本語に関する質問(単語の意味、文法、日本語の授業の課題)について答える 研究内容を説明する 生活に関する質問(保険、税金、安いお店の紹介など)に答える コーヒーを飲むかどうかたずねる
朝、夜	あいさつ 雑談
飲み会・イベント	メニュー・料理の内容について説明する 食べられる物(宗教上の制約)について説明する 雑談 飲み会、イベントの詳細(場所、日時など)について確認する
昼休み	電話の内容を訳す 共有のプリンタのインク・用紙を運ぶ手伝いを依頼する レポートでわからない問題について話す 交通手段について教える 雑談(昔の話、将来の話、夏休みの予定、日本の文化や習慣、相手の国について等)
研究	院試の手続きなどについて説明する 研究について話をする 使用する物品やその使い方について説明する 小学校の書類について説明する お土産のお菓子をいただいたときに話す ゴミの分別方法について説明する
自由時間	日本語に関する質問(単語の意味、日本語の授業の課題)に答える 生活に関する質問(保険、税金など)に答える
休日	一緒に出掛けた先での日本語の説明を通訳する
授業	指導内容や課題について翻訳する 講義内容もしくは指示内容を要約、説明する

食事	雑談(昔の話, 将来の話, 日本の文化や習慣, 相手の国についてなど) 注文の仕方や料理の種類や特徴を説明する
その他	実験内容について説明する 困っているとき(研究室で使える物の場所がわからない, 荷物の再配達などの依頼など)に助ける 日本語の文法について解説する 年金などの説明の書類

このような留学生との接触場面において、どの言語を使用しているかについて、日本人学生にたずねたところ、「主に英語またはその他の言語」と答えた人が24件中16件、「日本語と英語またはその他の言語の両方を使って話す」と答えた人が8件であった^{注4}。また、上記の場面において、コミュニケーションがうまくいかなかった・難しかった場面はどのようなものかを記述式でたずねたところ、「研究内容を説明する時に専門用語を伝えるのが難しかった」「実験操作や研究の内容を話すときはうまく伝えられなかった。」「専門用語が必要な会話は難しいと思った」などといった回答が6件あり、専門分野のことについて英語で説明しようとする際に困難を感じる場合が多いようである。また、「料理の説明の際、日本固有のものを英語で説明しにくかった」「(保険, 税金など)生活に関する質問」など、日本人学生が普段英語で話す必要のない話題についても挙がっていた。これらのことから、日本人学生は、主に英語で話している(話そうとしている)が、それだけではなく、日本語も交えながらコミュニケーションをとっていることがわかる。

次に、日頃、留学生とコミュニケーションする中で、こうしたことが日本語でできるようになると研究・大学生活がより円滑に進むのではと思うことについて、日本人学生に記述してもらった回答を以下に記す。研究内容やプレゼンといったアカデミック場面での日本語の使用も挙がっているが、全てを日本語で遂行することを求めるわけではなく、全般的に留学生が日常生活を送る上で必要なことが日本語できるとよいという回答が多い。また一方で、日本人学生自身の英語力向上の必要性も挙げている。

日本語でできるようになると研究・大学生活がより円滑に進むのではと思うこと

(記述は原文のまま)

- ・ショッピング, 道を尋ねるとき
- ・店の予約, 配達依頼
- ・自分の名前をカタカナで書けるようになること
- ・日本語の文章を読めて理解できたらよいと思う
- ・日本語の文章が読める
- ・別の留学生とのコミュニケーションで思ったことだが、「このメールを日本語で返してくれ」「この資料(日本語)には、何が書いてあるか」といった類の質問が最も多いと思う。こういった質問が日本語できるとより頼みやすくなるのではないだろうか。

- ・日常会話
- ・学習内容, 研究内容
- ・プレゼン(日本語で)←ゼミとか
- ・自分の苦手分野, 得意分野の説明
- ・雑談用の日常単語, ある程度のスラング
- ・絶対にできないことや必要なこと(宗教上の理由で)
- ・片言でも日本語でできれば大学生活が円滑になる
- ・日本人のあいまいな表現の理解
- ・私にもわかりやすい単語を選んで話してくれているので, 私が(英語で)聞くことについては問題ない。ただし, 私が英語で話せないので, 日本語の日常会話が聞いてわかるようになることもありがたい。
- ・逆に日本人学生の英語レベルが向上することで円滑なコミュニケーションがとれると感じる(研究関連の内容が多いこともあるため)

3) まとめ

本調査結果から, 本調査の対象である留学生が実際にどのような場面で日本人学生とやりとりをしているかが明らかになった。学内では研究や学習の多くの場面で日本人学生との接触場面が多く, 留学生は自身の日本語力が入門から初級前半レベルであっても, それらの場面での多くを日本語でやりとりする必要性を感じている。研究自体は英語を使って進めているという環境においても, 指導教員以外の日本人や学内の職員などから, 必要な情報を得, また人間関係を築き上げていく上で, 日本語ができたほうがよいと考えていることが窺われる。

また, 日本人学生が, 主に研究室やそれに付随する場面において, 留学生に対し実に様々な情報提供やサポートを行っていることがわかった。特に, 本調査では, これまで外部の人間からはよく見えない, 「研究室」における留学生と日本人学生のコミュニケーション・場面・話題を知ることができた。

これらの結果をもとに, 筆者らは, 初級レベルの理工系大学院留学生のための, 新たな教材のシラバスを構築した。

IV. 調査結果をもとにしたシラバスの構築

筆者らのこれまでの調査と授業実践をもとに, 次のように構想をまとめた。まず, 対象者は, 理工系大学院留学生で, 研究や学習で多忙であるが, 日本語学習を希望している留学生で, そのゴールは, 研究・日常生活で必要度の高い場面において, 日本語でやりとりができるようになることを目指す。そのために教材は, 場面・話題シラバスで構成する。これらの観点から, 次のようなシラバスを考えた(表7)。

表7 新AS教材 シラバス案

コース	課	場面・話題	言語行動
AS 1	1	自己紹介	自己紹介する
	2	研究室で	日時を決める, バスに乗る
	3	買い物	ものの所在をきく, 買う
	4	レストランで	注文する, 支払う
	5	週末の予定	週末の予定について話す
	6	パーティー	手伝う, 日本の生活について話す
	7	郵便局で	荷物を送る, 口座を開設する
	8	おみやげ	昼ごはんを誘う, 感想を述べる
	9	学務係で	書類にサインする, わからないことをきく
	10	病院で	症状を伝える, 診察を受ける
AS 2	1	研究室で	許可を求める
	2	PCの設定	依頼する, 手順をきく
	3	実験	指示を理解する
	4	ふるさと	家族やふるさとについて話す
	5	寮で	天気について話す, こみの分別を理解する
	6	幼稚園で	子どもの様子について話す, お知らせ文についてきく
	7	地震	危機の際しての指示を理解する, 助けを求める
	8	交通手段	電車の切符を予約する
	9	学会	道をたずねる, 機器の使い方をたずねる
	10	研究の相談	教員にアポイントを取る, 相談する

教材は、上記の場面・話題において、深川・高島(2018)でも述べたように、必要度の高い場面での日本語のコミュニケーション・スキルを身に付けながら、同時に必要な語彙や文法も体系的に学べるようになることを念頭においている。またこれらの内容を、授業だけではなく、eラーニング化することで、多忙な学習者でも自律的に学べるものにする予定である。

V. 今後の課題と展望

今後は、このシラバスにおいて、具体的に取り上げる語彙・表現やコミュニケーション・スキルを整理し、順次、教材の内容の充実化を進めていく予定である。

【注】

1. 金沢大学国際機構
2. 2018年度より、組織改編のため、それまでの「留学生センター」から「国際機構留学生教育部」という名称に変わった。
3. 回答者の中には人文系の学習者もいるが、ASコースに毎学期少数ながら人文系の学生もいるため、今回の調査対象にも含まれてる。
4. 羽吹・篠原(2014)においても、英語と日本語の使い分けについて調べている。留学生が教員、学生に対して話す場合、ゼミや指導などの研究に関する話は基本的に英語で、日常会話や雑談は日本語を使うという回答が多く、学生は相手の言語にあわせて使い分けしているという回答が見られたと報告されている。また、日本人学生も、留学生とは「いつも日本語を使う」が53.5%、「英語(または他の言語)も日本語も使う」の回答が38.3%で、留学生が日本人学生との使用言語について回答した結果とほぼ一致していた。英語と日本語の使い分けに関しては、留学生同様、研究や実験に関しては英語で、雑談や研究室のイベントなどでは日本語でという回答が多かったが、「留学生の日本語力や日本語を話そうとする姿勢に合わせる」という回答も多く見られたとしている。

【謝辞】

この報告での調査に協力して下さった留学生および日本人学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

【参考文献】

1. 鹿嶋恵(2005) 「初級準備段階としてのサバイバル・ジャパニーズのシラバス検討」三重大学留学生センター紀要, 第7号 pp.35-48
2. つくばランゲージグループ『Situational Functional Japanese』凡人社
3. 羽吹幸・篠原亜紀(2014)「理工系大学院留学生の日本語使用に関する一調査」国際交流基金日本語教育紀要, 第10号, pp.131-144
4. 山路奈保子・因京子・アブドゥハン恭子(2017)「雑誌英語で研究活動を行う留学生・研究者を対象とした日本語教育教材開発への示唆:市販教材使用の結果から」北海道言語文化研究, 巻15, pp.23-37

資料

アンケートの質問項目

<留学生向け>

■ PART 1

Please provide the following information by ticking (✓) the box or writing your response in the space provided.

- ・ Your Japanese language course : AS 1 AS 2 A
- ・ Your name:
- ・ Your student ID number:
- ・ Your native language:

■ PART 2

Please read each set of instructions, and write your answers below.

1. Think of situations in which you talked with Japanese classmates and/or colleagues as you studied or conducted research in science labs or other such facilities on campus, and write down details in the following table. Please provide as much information about the interaction (s) as you can.

*You may write in English or your native language.

✓	When	Where	With Whom	Topic of conversation
Ex. ✓	<i>experiment for my research</i>	<i>laboratory</i>	<i>Japanese students</i>	<i>I asked how to use a scientific instrument for my experiment.</i>
✓	When	Where	With Whom	Topic of conversation

2. Of the situation (s) that you listed above, during which do you want to communicate in Japanese? Please choose all that apply, and tick (✓) the appropriate box on the left.

<日本人学生向け>

■あなたについて

専攻

学年 {学類・大学院・その他} 年生 性別

■質問項目

1. 留学生(この質問紙をあなたに渡した人)と、日頃、どのような場面で話しますか。思い出せる限り、できるだけたくさん書いてください。

いつ	どこで	何をするとき/どのようなこと
例) 実験の前	研究室	実験器具の使い方を説明した

2. 上記1に挙げた場面の中で、コミュニケーションが難しかった、あるいはうまくいかなかったものがありますか。もしある場合、それは具体的にはどのような状況か、書いてください。

Japanese Language Education Curriculum Development for International Graduate Students of Science and Technology

Miho Fukagawa, Tomomi Takabatake, Kasumi Tago and Masako Tsutsui

Abstract

In order to clarify the situations in which international graduate students of science and technology at a Japanese university interact with Japanese people in their daily and academic life, we conducted a survey targeting both international graduate students and the Japanese students who study with them in the same laboratory. The results indicated that international graduate students interact with Japanese students while conducting experiments in a laboratory setting, participating in seminars, and discussing various topics in order to build relationships. Furthermore, findings suggest international graduate students strongly feel it is necessary to communicate in Japanese even when English is the primary language of instruction for university coursework. They also consider conversation skills to be necessary for daily interactions on campus. Based on these findings, we constructed a Japanese language course curriculum specifically for science and technology students which reflects the real situations in which communication occurs. Further development of the course curriculum and enrichment of teaching material will be necessary in the future.

Keywords

International Graduate Students of Science and Technology, Japanese Language Learning, Academic Settings, Course Design, Topic, Situational Syllabus